

牡鹿半島  
思い出  
広場

OSHIKAHANTOU  
OMOIDE  
HIROBA



おもひで写真帖  
～今、蘇る鮎川～

東北学院大学博物館 編

## ごあいさつ

東北学院大学では、東日本大震災で被災した牡鹿半島の文化財等の保全作業に取り組み、現在は旧牡鹿公民館の町史編纂資料等の整理に従事しています。こうした作業と同時並行で、震災の翌年から大学生の企画による牡鹿半島の歴史や文化に関する展示会を、鮎川・石巻・仙台でこれまで17回にわたり開催してきました。

そのなかで、大学生の企画・編集による、牡鹿半島の歴史・文化にまつわる冊子をこれまでに6冊刊行してきました。『牡鹿半島のくらしを未来に伝えよう』(2012年)、『一人ひとりのくらしの風景がみえてくる』(2014年)、『鮎川浜の賑わい:よみがえる60年前の古写真帖』(2015年)、『躍動する身体:よみがえる60年前の古写真帖Ⅱ』(2016年)、『くじら探検記:よみがえる100年前の古写真帖』(2016年)、『日本画家・平山郁夫が描いた「金華山の朝陽」』(2017年)です。

7冊目となる今回の冊子は、牡鹿半島の風景を撮りためてきた浜の大工・鹿井清介さんが撮影した昭和30年代の写真を集めます。内容は、まず鹿井さんの紹介を通じて鮎川の半世紀をふりかえります。そして、その写真に写り込んだ鮎川の魅力を紹介していきます。現在、大学生たちが鹿井さんの数百枚の写真を整理し、その内容について調査を行っています。いずれは報告書にまとめたいと思いますが、まずはその魅力を再認識していただくために、この冊子を編集いたしました。

最後に、本書作成のために写真をご提供いただいた鹿井清介さん、資料の掘り起こしや調査にご尽力いただいている成澤正博さん(鮎川の風景を思う会代表)のおふたりに、感謝申し上げます。

東北学院大学文学部歴史学科 教授 加藤 幸治



※本書の編集にあたっては、東北学院大学文学部教授の加藤幸治監修のもと、文学部研究生の佐藤麻南が編集総括を行った。内容は、民俗学実習履修の3年生(伊藤彩華、小原茉莉子、川嶋佐知子、熊谷爽佳、真田遼海、杉内香奈、津花麗、長野香純、三浦衣織、三浦万帆)が中心となって企画・編集を行った。

# 鹿井清介さんの人生から 鮎川を振り返る

## 1. 生い立ちから鮎川に来るまで



鹿井清介さん(佐藤麻南撮影)

鮎川で大工として数多くの家を建て、趣味のカメラを片手に鮎川の人々の暮らしを、華やかだった街の風景を収めてきた鹿井清介さん。1932(昭和7)年12月3日生まれの現在85歳である。仙台市青葉区北材木町、現在の春日町の生まれで、1945(昭和20)年7月に仙

台空襲で焼け出されるまで仙台で暮らしていた。鹿井さんは鹿井家のひとり息子として生まれ、祖父、父ともに大工であった。しかし、不況の影響で大工では食べていけず、鹿井さんの父・忠三さんは茨城県古河にあった乗員養成所で飛行機の整備士としても働いていた。そして、1945年(昭和20年)7月10日、仙台空襲により仙台市中心部は焼け野原となった。仙台市中心部に住んでいた鹿井さんの家も空襲により焼けてしまい、鮎川へ来た。鮎川には鹿井さんの母・あなよさんの兄がいて、そこを頼って訪れた。鮎川に来て一番初めは、一の鳥居のところにあった茶屋の建物を借りて2ヶ月ほど暮らした。そこから山鳥に移り、そこで6畳間と土間の倉庫を借りて3~4年ほど暮らしたという。鮎川に移ってきた当時、鹿井さんは尋常高等小学校の1年生であった。鮎川の尋常高等小学校に通うわけであるが、鹿井さんの妻・文子さんいわく

都会から来た鹿井さんは着ている衣服から持っている持ち物にいたるまで鮎川の子供たちとは違っていたという。

その頃、傘なんて誰も持っていなかったもの。それに私たち、下駄はいて学校さ行ったけど、この人はちゃんと靴はいてたからね。

戦後、日本では深刻な食糧難に陥り、GHQはこの食糧危機を克服するために全国の漁船と捕鯨船に出漁許可を出した。鮎川では、戦時中から戦う国民の食料確保のために捕鯨は続けられていた。鯨肉は当時の日本の食料事情を支える重要なたんぱく源であった。鮎川浜で捕鯨に携わる人々は、当時最も使命感に燃え、海の男として生きることに誇りを持ち充実感を感じていたという。昭和22年には、鮎川町立鮎川小学校が設立されたり、黒崎開拓農業協同組合が設立され、戦後の復興へ向け歩み始めた。

## 2. 大工修業時代

鹿井さんが鮎川に来て1年ほど経った頃、父・忠三さんが大工として再び働き始めた。当時は、鮎川では捕鯨が全盛期を迎える頃であり、町はにぎわいを見せていた。さらには、捕鯨のみならず、大謀網と呼ばれる大規模な定置網もかなり景気が良く、鮎川では小学校の教頭先生を辞めて漁師になる人までいたほどであった。鹿井さんも本当は捕鯨船に乗りたかったという。母・あなよさんの親戚に極洋捕鯨の捕鯨船に乗っている人がいて、“一緒に捕鯨船に乗らないか”と誘われていたそうだ。しかし、父・忠三さんについて大工をやるのがいいと思い、大工の道を選んだ。当時、鮎川にあった平山建築という工務店で父・忠三さんは働いており、鹿井さんも初めの2年は一緒に働いた。山鳥の家からまだ舗装されていない狭い道を毎日大工道具を抱えて歩いたのだという。仕事が終わるころにはすでに真っ暗で、周りは木が生い茂っていたため、

月明かりを頼りに空を見上げながら歩いたことが思い出されると鹿井さんは話す。

父の元での大工修行は厳しく、現場でも家でもかなり怒られたそうだ。父の厳しい指導は人前でもなされ、それがとてもショックだったという。しかし、父に厳しく仕事を叩き込まれたおかげで鹿井さんは鮎川では誰にも負けない大工になれたと語る。

仕事はね、厳しかったよ。親父がすごく厳しい人で、家でもだけど、現場でもかなり怒られたね。現場なんかでは、施主さんがいるでしょ？ 施主さんだけでなく、いろんな人が見に来ていてもお構いなしで怒鳴りつけられて、はたきつけられてね。あれは悲しかったね。陰で怒鳴られるならいいんだけど、みんないるところでだもの…。

### 3. カメラとの出会い



初めて買った“ミノルタ”のカメラ(佐藤麻南撮影)

鹿井さんが趣味であるカメラと出会ったのもこの頃である。カメラは元々父・忠三さんが好きで、撮るだけでなく引き伸ばし機も自作し、自宅で行っていた。引き伸ばし機はレンズが2つ必要であったため、双眼鏡を解体し、レンズを取り出して使った。枠は木で作り、大きな皿に現像液を

入れ、押し入れの中で写真の引き伸ばしをしていたという。そんな様子を幼い頃から見ていた鹿井さんはおのずと写真に興味を持っていった。自分で初めてカメラを持ったのは18歳の時。当時、カメラは高級品であり、よく“お父さん

に買ってもらったのか”と聞かれたそうだ。しかし、現場でもらうご祝儀を少しずつ貯めて自分のお金で買ったものだ”と鹿井さんは話してくれた。大工見習いといっても、家を建てると施主からご祝儀がもらえる。棟梁より金額は少なくても、ひとりの職人としてご祝儀をもらえたそうだ。それをコツコツ貯金し、仙台市の一番町にあった「コセキ」というカメラ屋で初めてカメラを買った。

自分で初めてカメラを持ったのは18歳の時だったね。みんなからよく「カメラどうやって手に入れたんだ？」って、「お父さんに買ってもらったのか？」って聞かれたね。でも違うんです。その頃にはもう大工になっていたから。大工っていうのは、家を建てると施主からご祝儀もらうんです。4人いたら4人それぞれもらえるんだよ。建前したらその日に1回、そして完成したら2回目。棟梁になると多くもらえるんだけど、そのほかの大工もそれぞれにももらえるんだね。それをコツコツ貯めて仙台に買いに行ったんです。一番町の「コセキ」というカメラ屋に買いに行ったの。

カメラを購入してからは、現場にも毎回必ず持って行ったという。そして、基礎ができたとき、上棟のとき、竣工のときなどのように家が出来上がる工程ごとに写真に収めていった。時にはその写真を施主に渡すこともあり、とても喜ばれたそうである。

網地島で仕事しているときだったかな。捕鯨船がちょうどクジラを船につけて港に入っていくところが見えて、カメラ持ってたもんだから、「ああ!」と思って、仕事そっちのけで写真撮りに行ったんだね。親父も一緒に仕事してたんだけど、おれが写真好きなの分かってるから何も言わなかったんだ。もう夢中で写真撮ったね。1時間くらいは仕事そっちのけで写真撮ってたんじゃないかな。



花火と捕鯨船(鹿井清介撮影)

鹿井さんが大工として修行を積んでいた時代、鮎川では捕鯨が最盛期を迎え、町はにぎわいを見せていた。昭和28年には鯨まつりが始まり、毎年多くの人が鮎川に集まった。鹿井さんもお祭りのときだけは仕事を休み、カメラを持って写真を撮りに出かけたという。そのなかでも鯨まつりの花火を写した写真は鹿井さんにとっても印象に残っているそうだ。毎年、当時牡鹿中学校で先生をしていた人と一緒に、花火を撮りにでかけた。シャッターを開けっ放しにして、うちわを使い、レンズにかぶせたり開いたりして花火を何発も重ねて撮影する。当時は毎年夢中になって花火を撮影したという。よく撮れた写真は貸してほしいと頼まれ、牡鹿中学校に長い間飾られた。一緒に花火を撮ったというその先生は、当時最新だったアサヒペンタックスの一眼レフのカメラを持っており、すごうらやましかったと鹿井さんは話してくれた。

写真の現像は、丸料丸の鈴木さんが家の蔵に暗室を持っており、現像の仕

方を教えてもらい、お祭りがあるとその日のうちに撮った写真のすべてを現像する。ときには夜通し作業していたこともあったという。

鹿井さんが大工見習いとして修行を積んでいたころ鮎川では、捕鯨が最盛期を迎えていた。ほかの捕鯨基地とは異なり、鮎川には大洋漁業、極洋捕鯨など大手の捕鯨会社がこぞって事業所を設置した。三陸沖の漁場がいかに注目されていたかをうかがい知ることができる。鮎川には全国から仕事を求めて人が集まってきた。捕鯨船に乗りクジラを捕る人、揚がったクジラを解体する人、捕鯨会社で働く人、「鯨肥作り」<sup>げいひ</sup>をする人、クジラの工芸品を作る人など多くの人がクジラにまつわる仕事をしてきた。また鮎川では、大手の捕鯨会社による商業捕鯨とは別に、地元資本の、家業としての小型沿岸捕鯨が行われていた。鮎川沿岸で主にミンククジラを捕り、食用を目的としていたことで、鮎川ではクジラを生で食べる文化が根付き、今でもミンククジラの刺身は鮎川の人たちにとってソウルフードとなっている。

町がにぎわいを見せていた昭和28年(1953年)、初めて鯨まつりが開催された。初めは青年団が企画したスポーツ大会からかたちを変え、各地域の婦人会のメンバーが仮装をしたり、出し物をする。毎年各地区ごとに工夫を凝ら



昭和30年頃の鯨まつり(鹿井清介撮影)

した出し物が行われ、盛り上がりを見せていた。当時の様子は鹿井さんの写真からも分かる。多くの人が皆同じものを見つめ、楽しそうな様子が伝わってくる。

#### 4. 一人前の大工として

鹿井さんが一人前の大工として活躍し始めたころ、鮎川には5～6軒の大工がいたという。鮎川という狭い地域の中でこれだけ大工がいたにもかかわらず、皆忙しく働いていたそうだ。それほどまでに鮎川は景気が良かったのである。鹿井さんへの依頼も多かった。近所の船主たちがこぞって鹿井さんのところへ来て、次々と家を建ててほしいと依頼してきたという。最長で4年待ってもらったこともあったそうだ。

**鮎川に大工は5～6軒いたんだよ。この狭い中にだよ。それでもみんな「清介、清介」ってね、辺り近所の船主さんたちがみんな鹿井にやってもらうんだって、お客さん来るんだから。**

そのなかでも鹿井さんにはこれまで建ててきた家のなかで忘れられない家があるという。鹿井さんが45歳(昭和52年)のときに建てた網地島の松尾丸、



上棟の様子(鹿井清介撮影)

当時は施主も船主が多く、皆屋号で呼んでいた。たいていの現場は半年程度で終わるというが、この現場は着工から竣工まで1年かかった。家の設計から材料にいたるまでこだわって建てたのだと鹿井さんは話してくれた。現場はあじしま網地島であった

が、これまでも網地島には何棟も建てていた。むしろ鮎川よりも網地島の方が多かったほどだそう。急に鹿井さんのところへ「家を建ててほしい」という依頼の電話がかかってきた。そのときは施主のことを知らなかったというが、「いくらかかってもいいからセンガイ造りでどこにもない家を建ててほしい」という依頼をされた。驚いたのは、契約のとき手付金だといって見たこともないような大金を持ってきたことで、そこから当時の景気の良さがうかがえたという。

**網地島の松尾丸、あれほど印象に残っている家はないね。松尾丸のことは知らなかったんだけどね、急に家を建ててほしいって電話がかかってきたんだね。契約のとき、港まで迎えに行ったんだよ。そしたらビニール袋下げてきて、魚でも持ってきたのかなと思ったんだ。家に着いたらテーブルの上にその袋置いて、手付金だって。大金が入ってたんだよ、ただのビニール袋に。あんな大金初めて見たよ。当時はね、かなり景気が良くて、網地島なんかは捕鯨より儲かってたんでないかな。**

そのとき鹿井さんはセンガイ造りを知らなかったというが、唐桑でセンガイ造りで家を建てていると聞き、見に行った。カメラを持ち、大工ということは伏せて2日間かけて唐桑を回ったという。建築中の家を訪ね、現場の大工に「見てみたいから見せてください。写真撮ってもいいですか?」と声をかけたそうだ。どの現場も快く見せてくれたという。そこから約1ヶ月かけて図面を描き、材料は施主のこだわりで、青森ヒバを使うため、青森県の下北や津軽にまで調達に行った。材料調達のために青森には3回は行ったという。材木屋や製材所を何軒も回り、一番安くしてくれるところを探したそうだ。大間町奥戸にある高橋製材所というところが一番安く、さらには旦那さんと奥さんの人柄に惹かれ、決めたといい。そこでトラックも手配してもらい、最終的に希望の半値で

仕入れることができたと言ってくれた。高橋製材所で鮎川までの地図を描き、トラックで運搬してもらう手配をした。

鮎川港からは石巻の丸本組の船を借りて網地島まで運んだ。いつもなら日本捕鯨の船を借りて運ぶそうだが、このときは木材の量が多く日本捕鯨の船では運べなかったのである。島に下ろしてからは現場まで島民総出で、木材を担いで現場まで運ぶ。網地島の場合は現場までの移送手段がないため、どの現場であっても、毎回島民総出で材料を運ぶという。とても大きい家だったので上棟するのに3日はかかった。そのくらい大きな家だったと鹿井さんは話す。工事中、普段であれば奥さんの文子さんが泊まり込みで鹿井さんをはじめとする大工、ほかの職人たちの食事の世話をするのだが、この現場では施主の空き家を借りて寝泊まりをし、食事もすべて施主が用意してくれたそう。工事中は、漁にも出ずにずっと工事の様子を見ていたといい、「ずっと見てたからやりにくかったね(笑)」と鹿井さんは話してくれた。

四方を海に囲まれ、耕地も少ない網地島では、人々は古くから漁業で暮らしていた。明治、大正、昭和にかけて長渡浜は沿岸漁業を中心として発展し、網地浜は昭和に入ってから遠洋漁業では県内一の先進地として近代的な資本制漁業を発展させた。大正期から昭和期にかけて日本では水産業界に漁船の大型化の気運が起こり、漁場も沿岸から遠洋へと拡大していった。三陸漁場へも関東、関西方面の大型漁船の姿が見られるようになり、網地浜では農林省の助成金を受け、県下に先駆けて大型漁船網地丸を建造して遠洋へと進出し、遠洋漁業の基地としての基礎を築いた。近代捕鯨の基地として栄えた鮎川に負けず劣らず、遠洋漁業で栄えていた。

## 5. 大工引退

鹿井さんが大工を引退したのは55歳(昭和62年)のとき。周りからは早す

ぎると止められたが、この歳になり高いところでの作業に恐怖を覚えたという。屋根の上での作業は若手の弟子には任せられない仕事であり、それができなくなったら引退するという鹿井さんのプロ意識があった。

大工を引退したあとは、風呂釜のセールスをした。これまで職人一筋で生きてきたため、人と話すことは苦手だったそう。このときの経験があったからこそ今、自分の人生や写真のことを色々な人に話せるのだと笑顔で語る。大工は辞めても、出かけるときは必ずカメラを持って行く。「昔は残りのフィルムの枚数を気にしながら写真を撮っていたけど、今はデジタルだから枚数を気にせず撮れるからいいね」と話す鹿井さんが印象的であった。

昭和57年(1982年)、国際捕鯨委員会により商業捕鯨の禁止が採択された。それに伴い鮎川でも、産業としての捕鯨から観光としての捕鯨へとシフトしていくことになる。

400枚にもものぼる鹿井さんの写真は、継続的に鮎川で活動を続けるなかでその存在を知り、2014年の鯨まつりで初めて展示をした。地域の人からは大反響で、その後もイオンモール石巻やサンファン館を会場に数回にわたり展示を行ってきた。これまで鹿井さんの写真も含む鮎川の古写真をまとめた冊子を、2度にわたり刊行した。今回は鹿井さんが撮影したものだけを1冊にまとめた。(文責 佐藤麻南)

### 参考文献

- ・気仙沼市史編さん委員会、1997年、『気仙沼市史V産業編(下)』
- ・唐桑町史編纂委員会、1968年、『唐桑町史』
- ・牡鹿町誌編さん委員会、1988年、『牡鹿町誌 上巻』
- ・牡鹿町誌編さん委員会、2005年、『牡鹿町誌 中巻』
- ・牡鹿町誌編さん委員会、2002年、『牡鹿町誌 下巻』

# ウェルカム!クジラの町!

～鹿井さんが見た鮎川のすがた～



昭和35年、当時の鮎川小学校から下る坂より撮影した、鮎川の全景。18歳でカメラを手に入れ、撮影を始めて最初の頃に撮った写真。現在この場所には家が建ち、木が生い茂り、電線が通っているため同じ構図で撮ることは難しい

鹿井さんが写真を撮り始めた昭和30年代、鮎川は捕鯨産業の最盛期を迎え、もっとも景気の良い時代でした。約3,800人(昭和30年)が暮らす町の中はいつでもクジラが放つ独特のにおいに包まれており、捕れたクジラは鯨油や鯨肉に加工され、余った内臓や骨は干して畑の肥料として使われま

した。また、道端で干されていたクジラの髭にはまだ身がついているものもあり、おなかを空かせた子どもたちのおやつになっていたそうです。人々は、まさにクジラと共に暮らしていました。

# クジラのおいしはお金のおいし

～鮎川の最盛期～



港に戻る捕鯨船。鹿井さんが捕鯨会社の事業所手前の岸壁から撮影したもの



解剖作業をする人たち。  
作業場の中に入らなければ、  
解剖の様子は誰でも見せてもらえた(クジラの解体のことを“解剖”と呼んでいた)

鮎川には3つの捕鯨会社があり、昼夜を問わず解体作業が行われました。まさに「クジラ」で忙しかったのです。また、主に岩手県の宮古から雇われてきた人々が、近海で定置網漁を行っていました。鹿井さんは、彼らが生活する小屋を修理した縁で漁船に乗せてもらい、写真を撮影したそうです。



大物を手に入れ満面の笑み



金華山近くの漁場にて、早朝から漁が行われる

# 情熱とユーマアが炸裂!

～人々が集う鯨まつり～



女性たちの情熱が注がれる仮装パレード



金魚すくいに  
集まる子どもたち

当時の好景気を象徴するものの一つが「鯨まつり」です。この頃の鯨まつりは婦人会が中心となり、地区ごとに様々な仮装をして町を練り歩きました。この日が来ると町の人たちはみな仕事を休み、祭りに参加します。町の外からも多くの観光客が見物に来ていたそうです。



鹿井さんはこの頃の花火が一番きれいだったと語る



当時流行った芸人の仮装。手には小学校から借りた巨大そろばん

# ナイスショット!

～日常の1ページ～



家族連れでにぎわう十八成浜での一コマ。鮎川から歩いて海水浴へ



海水浴場でのお昼休憩



おにぎりに  
かぶりつく女の子

このページの写真は、家族の日常を鹿井さんが撮ったものです。普段からカメラを持ち歩いていた鹿井さんだからこそ収められた日常の風景です。当時の様子が鮮明に浮かんできそうです。



仕事の合間の一服。工場におやつを届けるおばあさんに子ども達がついてくる



家の前で遊ぶ兄妹。当時は長屋を借りて住んでいた

# 神輿だ! ジョーサイ! 初巳大祭

～信仰の島「金華山」～



海岸から拝殿に戻る神輿。当時は、鮎川浜の20歳を迎えた男性が神輿を担いだ



観光客が祭りに集っている様子。海潮祓(かいちょうばらい)の特殊神事(海で潮水を汲み、行う神事)が行われる

蛇を使いとする弁財天を祭神の一柱としてお祀りしている黄金山神社では、毎年5月の初巳の日に初巳大祭を執り行います。神輿渡御の日は子供たちも楽しみにしていて、学校も午前で授業を切り上げました。捕鯨会社も無料で捕鯨船やミンク船を出し、地元の人や観光客を金華山へ渡します。鹿井さんを含め、祭りを心待ちにする見物客が神社に泊まり、毎年大広間で雑魚寝になるほどだったといえます。それも祭りの醍醐味だそうです。

坂を上る神輿。担ぎ手は苦しそうにしている



難所を超え、拝殿の階段に向かっている神輿。ゴールまであと少し

# 夏のにぎわい、ここにあり

～ 鮎川漁協前の港 ～



屋根。  
使われているのは  
雄勝スレートか

電柱。木製で  
コールタールが  
防腐剤の代わり

ゲート。  
鯨まつり仕様で柱に  
魚が描かれている

鮎川魚市場。  
2階の鯨館診療所  
にも見物客がいる

ミス西町パレード。  
若い女子に  
混ざるシニア

奥津まんじゅう。  
楕円形の饅頭で  
お土産定番品

おそろいの服装の  
女性。出し物で  
どや節を歌う

手ぬぐい、日傘が  
必要なほどの  
暑さだったか

観衆。当時  
サンダルはハイカラで  
下駄が主流

手前側はすぐ海で、  
岸壁ギリギリまで  
人がいる

# 祭りの響きにつつまれて…

～ 鮎川橋からメインストリートへ～



カクト。  
サンルームがある  
立派な洋館

鮎川映画劇場。  
この日は場内でも  
出し物をしてたか

ヤマキ商店。  
有名な看板娘が魚や  
塩などを売っていた

リヤカヤ商店。  
荷物の運搬に必要な  
リヤカーの販売

侍。パレードの  
順番待ちを  
しているのか

花の白虎隊。  
地区ごとに  
女性たちが  
仮装をする

東洋館。雑貨屋。  
日本酒「菊水」を  
販売

証誠寺の狸。  
仮装をしているのは  
体格のよい女性

演奏隊。  
トラックの上で  
アコーディオン  
などを弾く

女の子。  
ハイカラな厚底  
サンダルを  
履いている

# 南国にあこがれて...

## ～ 海岸通り ～



足が見える。  
2階から見物する人が  
いたようである

上海楼。  
半ラー半チャーハンが  
おすすめ

かきあめ。  
石巻のソウルフード。  
かきのエキス入り

万国旗。  
鯨まつりの  
にぎやかし

今留商店。  
クジラの買付け、  
小売りをしていた

鮎川釣具センター。  
自転車の修理も  
行っていた

八竜漁業解剖場。  
ミンク船の他に  
旋網もやっていた

ハワイアン。  
南国に憧れた  
女性たちの仮装

見物の子どもたち。  
服装が都会っぽく  
特徴的

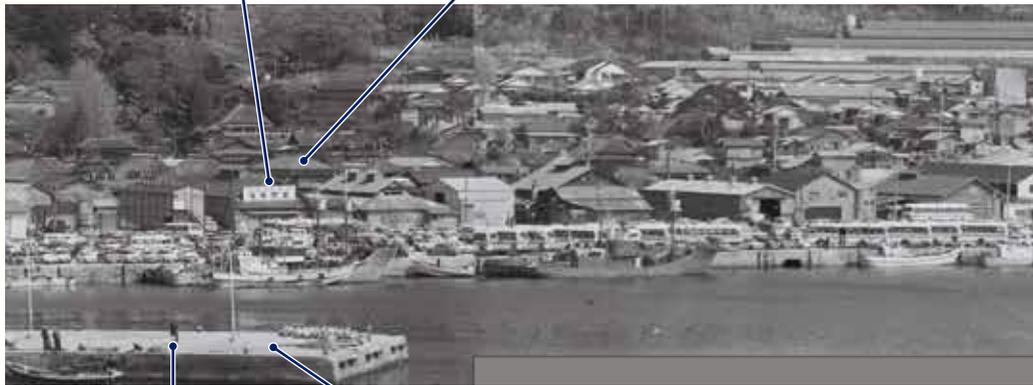
少年。  
水風船を持っている。  
出店で買ったものか

# 時代は観光へ

## ～ 旧町立鯨博物館から鮎川港を望む ～

鯨まんぢゅう。  
長寿万重、葬式  
まんじゅうも同じ

伊藤商店。  
元々はかやぶき  
屋根であった



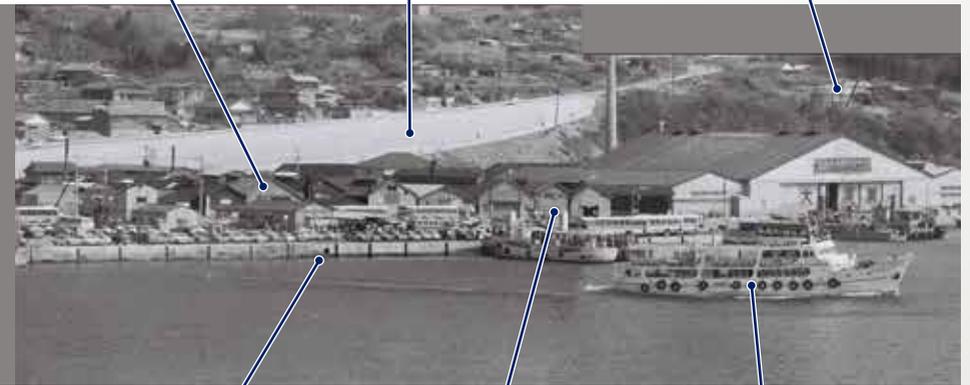
海を見つめる人と、  
声をかける警察官

栈橋。  
鯨まつりの盆踊り、  
花火の見物会場であった

カクトの工場。  
鯨肥の工場か

県道。  
コバルトラインが  
開通した頃か

給油タンク。  
小さいタンカー船を  
使い捕鯨船へ給油



排水用の穴。  
海が干潮だった  
ことがわかる

「歓迎」と書かれた  
ゲートが港にある

丸中金華山汽船  
はやぶさ。  
収容人数は300人



おもひで写真帖  
～今、蘇る鮎川～

監  
編  
発  
行

修：加藤 幸治  
集：佐藤 麻南  
行：東北学院大学博物館  
発 行 日：平成30年3月31日